

物言わぬブルーシート

奥田 和子

平成 28 年鳥取県中部地震では「地域力」がうまく発揮されたという。「自分たちの地域は自分たちで守る」という気概が感じられたというから頼もしい。今回最大震度 6 弱に遭遇した中部地区の 5 市町村の自主防災組織率（組織されている地域の世帯数数／管内世帯数×100＝％、鳥取県危機管理課、平成 27 年 4 月現在）は琴浦町 99.1、湯梨浜町 94.7％、北栄町 94.1％、倉吉市 79.2％、三朝町 90.0％である。この三朝町では、地震発生から 3 時間後には町内 63 集落 2,600 戸の安否確認を終え、町の対策本部に報告を済ませたというからアッパレである。

なかでも赤崎・港町の自主防災会は、各戸が火災報知器、非常持ち出し袋の備えを実行し、防災倉庫を町の高台広場に建て、そこに救援用リヤカー、発電機、担架、毛布、ヘルメットなどを常備しているという。口先ばかり達者な連中とは一線を画し本気で汗を流しているという。見習うべきである。

鳥取県中部地震では平成 28 年 11 月 21 日現在で半壊、一部損壊各 95 棟、12,525 棟が被害を受けた。当然屋根も瓦が落ちたりずれたりした。そこに強風と雨の予報が入り住民たちを不安に落とし入れた。ブルーシートが大幅に不足した中で、雨もりとさらなる損壊を心配した市町村民は、早急にブルーシートを配給せよと自治体に迫った。しかしブルーシートを屋根にかぶせるのは簡単なことではない。屋根に上がって固定したり、土のうをのせたりしなければならない。高齢者や母子家庭には難しいかもしれない。これこそ共助であり、地域はこうしたまさかの時にブルーシートを屋根にかぶせる専門家集団と連携を結び土のうの準備の仕方など訓練しておかねばならない。

屋根の修理は自分の家の問題である。自分の家の屋根は自分が守らなければならない。日頃からブルーシートを各自で備蓄しておかねばならない。ここまでは自分ができる範囲であるし、自分がしなければならない自助である。地域ぐるみで損傷の激しい家をトリアージュし順次修理する方法もあるだろう。共助は日頃の話し合いや訓練が必要である。壮大なビル群ではなく戸建て住宅、それも古い建物が多い市町村では、職人の人手不足を解消するために若手技術者の養成にも力を入れなければならない。公助にばかり頼っていても事態は解決しない。

物言わぬブルーシートはふだん無用者扱いされているが、災害が起こると一挙に屋根にかけあがり、屋根の下での家族の安らかな眠りや和みを保証する唯一無二な宝物に昇格する。



鳥取県中部地震直後の倉吉市内の住宅地（2016年10月29日撮影）

（2017年1月）